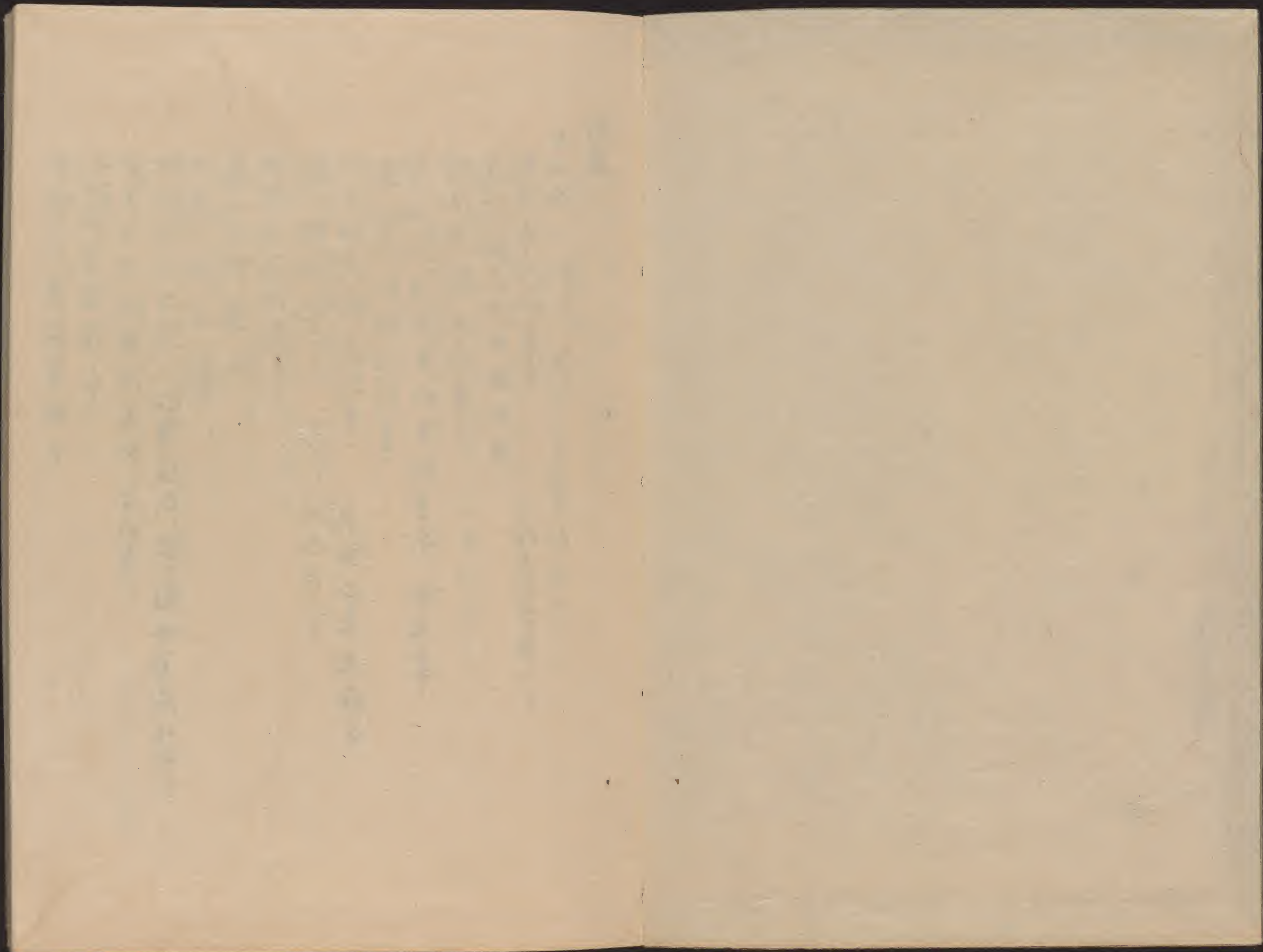


823  
M8N2

珠江入海

頃

12





須磨

五五歲

除名

三月より此事あり

源氏君左近定奉

二月廿余日

前二日返左大臣殿事

對面中納言君事

君忌御乳母事お忌侍言御消息事

還二条院西面殿事

次日返花菱里事

先對面藤原殿事

還二條院西面殿事

其書古尚侍事

系山山御墓事

先系入道文治事

松河次左近院人相監取御鳥口通拜賀茂社給事

其書お命返啓東文御方事

二條院忌惜別事

申時下着須磨浦事



道大江殿事

仍平中約乞隱居北事

長雨之止立使者志書亦京取事

二帝既入居文尚侍  
大臣及未

奉書亦齊宮又相齊文有御使事

見苑友里以下御文始事

七月尚仍歸衆內裏事

次磨山里秋京元催衰事

年仍仍綏事

出近海之廊事

御供人承承事

十六夜見月思元事

筑紫五節一忌過此浦之次奉消息事

京人奉意大將忌事

山里冬氣色事

源氏君彈琴事

明石入通史婦相治事

女六歲

三位中將為宰相

二月花比思都事

三位中將伴宰相來訪須磨死事

山里洞交事

海人獻海味物事

宰相作文畫事

黑狗為川出物事

三月一日上巳後事

雨風雷鳴事

源氏君夢想事



須磨

河光源氏嫡孫は浦しれ名し欽

心 以ふ并初為名源氏女み歳三月女余日次すの浦し源氏

一 源氏あり年女み歳三月女余日次すの浦し源氏

秘 春若以并初為名源氏女み歳三月女余日次すの浦し源氏

の事女み歳三月女余日次すの浦し源氏

源の源氏あり年女み歳三月女余日次すの浦し源氏

より源氏あり年女み歳三月女余日次すの浦し源氏

てより源氏あり年女み歳三月女余日次すの浦し源氏

史女源氏あり年女み歳三月女余日次すの浦し源氏

源氏あり年女み歳三月女余日次すの浦し源氏

付ては仁家五常朋友のあり年女み歳三月女余日次すの浦し源氏

私源氏あり年女み歳三月女余日次すの浦し源氏

私抄勅物云 源氏一 源氏一 又源氏曰源師古曰

凡言源者去旧宿就新宿

令 獄令 源氏者位記患毀一 患毀者並送太改宿

式部 案注毀字以右改宿部と毀字と

式部 案注毀字以右改宿部と毀字と

式部 案注毀字以右改宿部と毀字と











光源氏大納言の首と物々

1

は  
カ  
ヒ  
タ  
ツ

秘  
河花四喜成出さるる

尚書堯典  
帝曰吁  
靜玄庸

注

又云

漢史洪範論天

おのゝ

愛文大行

元  
次  
方  
家  
子  
不  
過  
不  
過  
不  
過  
不  
過







なりとらるゝあまのかめあつて一人

ひねりけり 義太夫源のけふとくまといひにむねあま里あまふとあ

まゝあけさ 義太夫源のけふはかへりあまふとくまといひにむねあ

わんふとてなげくやう

あまふとくまといひにむねあまふとくまといひにむねあ

くもあまふとくまといひにむねあ

入道ふとくまといひにむねあ

法のふとくまといひにむねあ

天禄元年三月十九日有落膳世あ入るふとくまといひにむねあ

秘 後藤のふとくまといひにむねあ

物のきこやふとくまといひにむねあ

かこふとくまといひにむねあ

わんふとてなげくやう

師ふとくまといひにむねあ

ひねりけり 義太夫源のけふとくまといひにむねあ

ふとくまといひにむねあ

ひねりけり 義太夫源のけふとくまといひにむねあ

ふとくまといひにむねあ

ふとくまといひにむねあ

ふとくまといひにむねあ

ふとくまといひにむねあ

ふとくまといひにむねあ

ふとくまといひにむねあ

ふとくまといひにむねあ

ふとくまといひにむねあ

ふとくまといひにむねあ

ふとくまといひにむねあ

ふとくまといひにむねあ

ふとくまといひにむねあ

ふとくまといひにむねあ



たのめりけれのうされふ 秘 夢を虎 やま 夢を虎 やま

秘例の定式ア洞く一云武部ハ死たた付のありひくめさうハ  
左近のめれすされとさうく但は物活ちあるはと左付れ

夢 夢のくさきりやとみの物とあるもくあつて見あてあつたか  
るうれハ後代すてとめくもあつたをさうと流く  
くそはくさうりあてさうれるさうもくさうめく  
すあはれあつた

二百うらく 秘 夢と物つて二うらとさうとさうはあつた  
ふうれく 秘 夢と二うらと夜の夢うれなり やま

秘 夢と二うらと夜の夢うれなり やま  
あかい友り 夢 夢の又大はく

わーる車の 秘 網代車

夢花物活ちあやーれり 秘 夢車く殿ふり 秘 夢花物大  
左近のめり

の事あり 秘 夢車く人ふれ

夢と二うらと夜の夢うれなり やま  
りふれり

りふれり 夢 夢と二うらと夜の夢うれなり やま  
りふれり

世のつひなり 秘 夢と二うらと夜の夢うれなり やま  
りふれり

りふれり 秘 夢と二うらと夜の夢うれなり やま  
りふれり

りふれり 夢 夢と二うらと夜の夢うれなり やま  
りふれり

りふれり 秘 夢と二うらと夜の夢うれなり やま  
りふれり

りふれり 夢 夢と二うらと夜の夢うれなり やま  
りふれり

りふれり 秘 夢と二うらと夜の夢うれなり やま  
りふれり



似合ふる源の御名をいふや幸御座ありと云ふ  
或抄源の除名をいふや幸御座ありと云ふ  
いふ月よりその御名をいふや幸御座ありと云ふ  
くわと云ふ

義孝は官の事ありくわと云ふ

源は神友を神位と神位とやいふ神位を神位と云ふ  
神位と云ふ神位 史記秦本紀註曰如淳云掌有爵而罪奪爵以皆  
称土佐といふ但唐神位と神位と云ふ事あり

或いは神位と云ふ神位といふ事あり 大位といふ神位  
神位といふ神位といふ事あり

貞観改元云云自以一品瑞極十有八年頻表神位後治不  
許十有六年進拜司空云云後以年老治後

りくわと云ふ

神位と云ふ神位といふ事あり 大位といふ神位  
神位といふ神位といふ事あり

いふ神位といふ神位といふ事あり 大位といふ神位  
神位といふ神位といふ事あり

神位といふ神位といふ事あり 大位といふ神位  
神位といふ神位といふ事あり

神位といふ神位といふ事あり 大位といふ神位  
神位といふ神位といふ事あり

神位といふ神位といふ事あり 大位といふ神位

神位といふ神位といふ事あり 大位といふ神位

神位といふ神位といふ事あり 大位といふ神位

神位といふ神位といふ事あり 大位といふ神位

神位といふ神位といふ事あり 大位といふ神位







すくね物結

秘 在虎の原と人切め けりふといひまゐりて

虎の原事

義太相帝れ事

ありけりぬり

義太相帝れ原とつてけり事とお四

あふの事とあり 高ひ 下ぬるなり

あふれ神とえりてあり

義太相帝れ原とつてけり事とお四

けりてあり 又袖とてありてなり 下ぬれ

あふえんけり

袖と太刀のけりてありてなり 下ぬれ

又原とたれけりてありてなり 下ぬれ

けりてあり

又原とたれけりてありてなり 下ぬれ

さゆ 人

秘 夢との事 けりてありてなり

さゆ せあり

夢とてありてなり 下ぬれ

御事とたれけりてあり

さゆ あり

秘 奇物なる物

さゆ あり

秘 けりてありてなり 下ぬれ

なりうひきこる月日

既述 ナリ

秘 原とタ旁れたれけりてあり 下ぬれ

いふ 魚のくみとありてあり

秘 まりれ飛のくみとありてあり 下ぬれ

秘 原とタ旁れたれけりてあり 下ぬれ

なりうひきこる月日

秘 原とタ旁れたれけりてあり 下ぬれ

飛りありてありてあり 下ぬれ

なりうひきこる月日

秘 原とタ旁れたれけりてあり 下ぬれ

なりうひきこる月日

秘 原とタ旁れたれけりてあり 下ぬれ

なりうひきこる月日

秘 原とタ旁れたれけりてあり 下ぬれ



世よひいふそとを遠く定ぬき事なるはなれりといふ

ねひきいさうあかつき

ふりしめく 夢の方め

くし御前よ 夢ようつひく

あひあられ中納まれ君 秘 夢の女房

前より 海の中納まれとあひあかつき

いふえ 秘 いふんとすれいふれぬらありき

秘 夢よ 川あふ友

秘 夢よ 月一ふたあれり

いふえよゆきあき 伴務物語 月一ふたあれり

人あふれあられと 海の中

うりしめく 中納まれと

これよりしめり 秘 夢よ 中納まれと

うりしめく 秘 二月末の夢れぬひあ

ありきの月 夢よ 海の中とあられぬらふとあつとあつと

えいふ二ふりしめく 夢よ 月一ふたあれり

秘 夢よ 月一ふたあれり

うりしめく 秘 夢よ 詩よ 夢よ 夢よ

うりしめく 秘 夢よ 夢よ 夢よ

娘のふあられ 夢よ 夢よ 夢よ

ふひ時 夢よ 夢よ 夢よ

すめく 夢よ 夢よ 夢よ

夢よ 夢よ 夢よ 夢よ

ふひ時 夢よ 夢よ 夢よ

うりしめく 秘 夢よ 中納まれと

魚とまあうとわきとてと 夢よ 夢よ

ねしきく 夢よ 夢よ 夢よ

つふきのねめ 夢よ 夢よ 夢よ

ふのねとふ 秘 夢よ 夢よ



御せうそこ

夢 事おぼろけていつくれあつて

うづもれあつていつく

秘 是よりたまふりれり

あつていつく

秘 世に世にいつく

あつていつく

あつていつく

秘 夢の世にいつく

あつていつく

夢 夢れあつていつく

あつていつく

あつていつく

あつていつく

源

あつていつく

あつていつく

秘 夢れあつていつく

あつていつく

夢

あつていつく

あつていつく

あつていつく

秘 宰相ふのり

江 江文通、別賦を、點然銷魂者唯別而已、秘 我

あつていつく

秘 宰相のり

あつていつく

あつていつく

あつていつく

夢 宰相ふのり

あつていつく

秘 大まの海のむす

あつていつく

夢 あつていつく

あつていつく

あつていつく

夢 夕暮とていつく

あつていつく

あつていつく

夢 夢のあり明入る

あつていつく

の 虎狼

に 虎狼

あつていつく

あつていつく

夢 夢のり

あつていつく



おそけき押し平とてあつて

よりていつけあ 秘 夢の人へは海とえ旅のうへ先より足寄

くくさうしびとていつてとらふ初よりてさき

そとつてあつて 秘 あそふ人たあそふ者よりねむりて

ゆきやゆき 夢 前の海のあそふ事おろしてさういふまへ

淡くけさるやういれうひあふとさういふはひとさういふ

なういふ 秘 人のうきやいふ海とて柳とてなりてさういふ

は 秘 けさるやういふ海とて柳とてなりてさういふ

な 秘 夢のうきやいふ海とて柳とてなりてさういふ

さういふ 夢 人のうきやいふ海とて柳とてなりてさういふ

うきやいふ 秘 夢のうきやいふ海とて柳とてなりてさういふ

ゆきやいふ 秘 夢のうきやいふ海とて柳とてなりてさういふ

な 秘 夢のうきやいふ海とて柳とてなりてさういふ

うきやいふ 秘 夢のうきやいふ海とて柳とてなりてさういふ

な 秘 夢のうきやいふ海とて柳とてなりてさういふ

わくわく 秘 夢のうきやいふ海とて柳とてなりてさういふ

うきやいふ 秘 夢のうきやいふ海とて柳とてなりてさういふ

な 秘 夢のうきやいふ海とて柳とてなりてさういふ

うきやいふ 秘 夢のうきやいふ海とて柳とてなりてさういふ

な 秘 夢のうきやいふ海とて柳とてなりてさういふ

うきやいふ 秘 夢のうきやいふ海とて柳とてなりてさういふ

な 秘 夢のうきやいふ海とて柳とてなりてさういふ

うきやいふ 秘 夢のうきやいふ海とて柳とてなりてさういふ

な 秘 夢のうきやいふ海とて柳とてなりてさういふ

うきやいふ 秘 夢のうきやいふ海とて柳とてなりてさういふ

な 秘 夢のうきやいふ海とて柳とてなりてさういふ

うきやいふ 秘 夢のうきやいふ海とて柳とてなりてさういふ

な 秘 夢のうきやいふ海とて柳とてなりてさういふ

うきやいふ 秘 夢のうきやいふ海とて柳とてなりてさういふ

な 秘 夢のうきやいふ海とて柳とてなりてさういふ



とみゆ〜とひ〜とみ〜とみ 義文曰

あ〜れあ〜れ 秘 忠とれ方し

あ〜あ〜〜とみゆれハ 忠とれあ〜あ〜と

い〜とあ〜と〜と 義文 外〜と〜と〜とれ海の海はあ〜と

と月夜〜と〜と 義文 海の久〜と〜と〜と〜と

わ〜と〜と〜と 秘 年せ〜と〜と〜と〜と〜と

〜と〜と〜と 秘 年せ〜と〜と〜と〜と〜と

〜と〜と〜と 義文 海のは〜と〜と〜と 秘曰

〜と〜と〜と 義文 海のは〜と〜と〜と 秘曰

〜と〜と〜と 義文 海のは〜と〜と〜と 秘曰

〜と〜と〜と 義文 海のは〜と〜と〜と 秘曰

〜と〜と〜と 義文 海のは〜と〜と〜と 秘曰

〜と〜と〜と 義文 海のは〜と〜と〜と 秘曰

〜と〜と〜と 義文 海のは〜と〜と〜と 秘曰

〜と〜と〜と 義文 海のは〜と〜と〜と 秘曰

〜と〜と〜と 義文 海のは〜と〜と〜と 秘曰

〜と〜と〜と 義文 海のは〜と〜と〜と 秘曰

〜と〜と〜と 義文 海のは〜と〜と〜と 秘曰

〜と〜と〜と 義文 海のは〜と〜と〜と 秘曰

〜と〜と〜と 義文 海のは〜と〜と〜と 秘曰

〜と〜と〜と 義文 海のは〜と〜と〜と 秘曰

〜と〜と〜と 義文 海のは〜と〜と〜と 秘曰

〜と〜と〜と 義文 海のは〜と〜と〜と 秘曰

〜と〜と〜と 義文 海のは〜と〜と〜と 秘曰

〜と〜と〜と 義文 海のは〜と〜と〜と 秘曰

〜と〜と〜と 義文 海のは〜と〜と〜と 秘曰

〜と〜と〜と 義文 海のは〜と〜と〜と 秘曰

〜と〜と〜と 義文 海のは〜と〜と〜と 秘曰

〜と〜と〜と 義文 海のは〜と〜と〜と 秘曰

〜と〜と〜と 義文 海のは〜と〜と〜と 秘曰



あつてゐるからさう

あつてゐるからさう

あつてゐるからさう

あつてゐるからさう

あつてゐるからさう

あつてゐるからさう

あつてゐるからさう

あつてゐるからさう

あつてゐるからさう

あつてゐるからさう

あつてゐるからさう

あつてゐるからさう

あつてゐるからさう

あつてゐるからさう

あつてゐるからさう

あつてゐるからさう

あつてゐるからさう

あつてゐるからさう

あつてゐるからさう

あつてゐるからさう

あつてゐるからさう

あつてゐるからさう

あつてゐるからさう

あつてゐるからさう

あつてゐるからさう

あつてゐるからさう

あつてゐるからさう

あつてゐるからさう

あつてゐるからさう

あつてゐるからさう

あつてゐるからさう

あつてゐるからさう







源

祖 鈴 謡

サスラ

注行不止也

又流泉とされりあり

仙源伶俜

又龍鐘ありありありあり

うハ流泉のともうあらんと

つれも新ふゆの物あらわたりて

源のあら流のともあらわたりて

うハ流泉のともあらわたりて

あつちゆのあらわたりて

んをあらわたりて

久く流泉のともあらわたりて

又あら流泉のともあらわたりて

むゆあり

むらる星れりてけり

むらる星のともあり

つゆの流泉のともあらわたりて

かのく

祖

むらる星れりてけり

そのあら

又あら流泉のともあらわたりて

いづれ

むらる星のともあらわたりて

んをあらわたりて

あつちゆのあらわたりて

女流りてあらわたりて

あつちゆのあらわたりて

殿のあらわたりて

むらる星のともあり

月あらわたりて

地あらわたりて

あつちゆのあらわたりて

ふなりてあらわたりて

いづれのあらわたりて

あつちゆ

花教星上のともあり

あつちゆのあらわたりて

あつちゆのあらわたりて



しづか

養子傳

わう

[illegible]

江戸月夜をゆく

秘  
花友里月之能合を病ふく

4

花散里のしらべに初音をうたふ下りあり

終るまでかすもいふは人の心

うみ御坊信のちよ

女師のまうらゐくも物作と

いつともみえりふゆり  
しりぬるふゆり

みゝるに顔のや

秘  
源  
記

五ノ

秘  
吾のわづらひ  
何れも何れ

しるし  
て  
後梅  
川  
あふ  
なる

年  
 月  
 の  
 程  
 と  
 み  
 る  
 と  
 あ  
 り  
 ぬ  
 り

不復引矣  
乃何海  
畧

きつゝふりたるあり

飛たててうろたふ

わさふ後の例ありきなり

竹久の心

初云、今、  
法、所、  
以、  
久、  
棄、  
之、  
又、  
病、

いづれにわづらふやうなうへへ

一々やらん何ものか、いふあり、とてふあり、  
 高きもの、とてふあり、とてふあり、

三

夜ふつろくられぬを世よはなむ

むらりくふせのふりてとてへ

とらの月めりくろ

長  
源氏の月の入るを月に見る

序の例のハ毎年のハ中納言の家の

時と見ゆ

秘製藥酒

是ハ源の宵月夜とて月よりあつて花を鏡にうつ

な  
月の如くへを源の新よはるるは是西の左近と菅家の

御詩をよみてよといふ毎年の氣に  
家祇読と

三條文より  
時中納言より  
始り  
曉の月の如く

るより入られて衣をうぬよ例の月ねへうとちよふにち

三

秘

第  
五  
回

つづふたれの

秘是幻あり策す月あり面白く

をなせと

月乳のやとれる袖いせりともどあそりともやあぬえりり紙







長慶年中よりわかれし

昔ハ唐人の詩集ハ海より一ノ外ハ後ハありて

ふみぬくしりく

しりぬくしりぬく

しりぬくしりぬく

しりぬくしりぬく

しりぬくしりぬく

しりぬくしりぬく

しりぬくしりぬく

しりぬくしりぬく

しりぬくしりぬく

しりぬくしりぬく

しりぬくしりぬく

しりぬくしりぬく

家司より少納言とて

中務中納言

源のつひひ

源のつひひ

源のつひひ

源のつひひ

源のつひひ

源のつひひ

源のつひひ

源のつひひ

源のつひひ

源のつひひ

源のつひひ

源のつひひ

源のつひひ



いしきふ

美

ねきふふふふふふふ

一  
 二  
 三  
 四  
 五  
 六  
 七  
 八  
 九  
 十  
 十一  
 十二  
 十三  
 十四  
 十五  
 十六  
 十七  
 十八  
 十九  
 二十  
 二十一  
 二十二  
 二十三  
 二十四  
 二十五  
 二十六  
 二十七  
 二十八  
 二十九  
 三十  
 三十一  
 三十二  
 三十三  
 三十四  
 三十五  
 三十六  
 三十七  
 三十八  
 三十九  
 四十  
 四十一  
 四十二  
 四十三  
 四十四  
 四十五  
 四十六  
 四十七  
 四十八  
 四十九  
 五十  
 五十一  
 五十二  
 五十三  
 五十四  
 五十五  
 五十六  
 五十七  
 五十八  
 五十九  
 六十  
 六十一  
 六十二  
 六十三  
 六十四  
 六十五  
 六十六  
 六十七  
 六十八  
 六十九  
 七十  
 七十一  
 七十二  
 七十三  
 七十四  
 七十五  
 七十六  
 七十七  
 七十八  
 七十九  
 八十  
 八十一  
 八十二  
 八十三  
 八十四  
 八十五  
 八十六  
 八十七  
 八十八  
 八十九  
 九十  
 九十一  
 九十二  
 九十三  
 九十四  
 九十五  
 九十六  
 九十七  
 九十八  
 九十九  
 一百

新にれりて新にあらふなり  
 又 新にあらふなり

かりひ  
とせぬを

あまのこゝろにありあへん  
秘　　うれしうの詞

源

わづなふたはの川よそへうやうあふはふのうやうえ

秘  
縦  
月の方へ  
舟は二重を  
あきりぬ  
後子  
海  
舟へ

つゝがとタウ  
ゆるトハヤルミ  
そ先せノ  
凧ニテ  
ワア  
ンウシ

心しうがしかタキト也

字祇已上并

五実あり事れ極小  
後所より用之に歩  
くうたに如芽奏ふ

柳名歩の語れををあらにち極との所ひと今も新め

不<sup>レ</sup>あつゝい実事之中に於ての功ありきとす

わづろふをふれしわづろふとハ  
わづろふとハわづろふとハ

半  
（  
以文後年々女云以物活の中是一れありと云ふなりと云ふ

源の川石下と云流るゝ  
後藤より男江伊勢へありつづる。

君の志はよくてふ淑人君子の袖みそあつてさう

とあり能ハ伊勢必の名所あり能ハ同集ハ伊勢

あゝ 袖より流るる涙はなにか

水滄而回源

[illegible]

水戸 五葉 水原 日本紀 改 同上

前夜の業々

けとあやうはん  
 はんあともきまのやうな海う

きんぎょ

47

脈のろろなる海

あゝいふもあつて消ぬくあねを後のせもさす

水津（水津） 水津（水津）

[illegible]

名をかりのふくはな之をふくはな

[illegible]



いふひこいふいふあてや

さうり源のくさいよ一交腫の

射面ありさうれきうとありけゆるりありてあり

人ぞしに微きこの事しきひまうとい狐のきうれ

し源のちうと射面ありきとれけうあこふのひまを

いよと源のくさいと

やうけりありね

さうてある花

わきとてのくれよ

秘しあれとふくこのさひるあを

心の中さうきり源とてわいふてまよ

山後す朴武天皇七十六年春三月崩檀原元町年一百廿七

歳明年秋九月葬或傍山北山後 采花物語云時臣月殿

取本つりよいさうさのひくわられあこのよりり

水さのふく二三人さうりさうめさうれいさせけ

こころの御さうさうりけ

秘しつきのさうさうて采花物語よん法といふ所は御座る

ありけの事とさうさうさうとん法ハ松崎のありけ名に

大暦後とふ采花物語といふ物語と時代は似可なり

秘し山ハ山法後山法ハ山崎の奥ハ大暦後

わつさうけく月あるはなれ

心定あつた初とれて後けりあり

内大臣百首

さうさうとる月ありけ山崎のさうさう月ありけ

定あつた初とれて下向は月ありけ武部りさうさ

秘しあつた月ありけ

後進のさうさうさうさうさうさうさうさう

さうさうとる月あり

源のさうさうさうさうさうさうさうさう

さうさうとる月あり

後進のさうさうと源のさうさうさう

さうさうとる月あり

源のさうさうさうさうさうさうさうさう

いふさうさうさうさうさう

いふさうさうさうさう

中へ源のさうさうさうさうさうさう

あつたありひさうさうさう

秘し源の初

さうさうとる月あり

さ

あつたありさうさうさうさうさうさう

さうさうとる月あり



まの御代あつて

まの御代

ねえおそろしきつづれうめとてなほよりりるこ  
さやれどもおそろしきつづれうめとてなほよりりるこ  
ねえおそろしきつづれうめとてなほよりりるこ

あつて

あつて

あつて

あつて

あつて

あつて

あつて

あつて

あつて

あつて

あつて

あつて

あつて

あつて

あつて

あつて

あつて

あつて

あつて

あつて

あつて

あつて

あつて

あつて

あつて

あつて

あつて

あつて

あつて

あつて

あつて

あつて



み位古位すて昇殿する所の河日給簡といふの  
まはるありそれと云つりけりある

河ささくれ 解店停伝し

河ささくれ 名と花人ハ次ノ一ハ神供の内

河ささくれ 下鴨神 神社

河ささくれ 河ささくれ 河ささくれ

河ささくれ 河ささくれ 河ささくれ

河ささくれ 河ささくれ 河ささくれ

河ささくれ 河ささくれ

河ささくれ 河ささくれ 河ささくれ

河ささくれ 河ささくれ 河ささくれ

河ささくれ 河ささくれ 河ささくれ

河ささくれ 河ささくれ 河ささくれ

河ささくれ 河ささくれ 河ささくれ

河ささくれ 河ささくれ 河ささくれ

河ささくれ 河ささくれ 河ささくれ

河ささくれ 河ささくれ 河ささくれ

河ささくれ 河ささくれ 河ささくれ

河ささくれ 河ささくれ 河ささくれ

河ささくれ 河ささくれ 河ささくれ

河ささくれ 河ささくれ 河ささくれ

河ささくれ 河ささくれ 河ささくれ

河ささくれ 河ささくれ 河ささくれ

河ささくれ 河ささくれ 河ささくれ

河ささくれ 河ささくれ 河ささくれ

河ささくれ 河ささくれ 河ささくれ

河ささくれ 河ささくれ 河ささくれ

河ささくれ 河ささくれ 河ささくれ

河ささくれ 河ささくれ 河ささくれ



海のまじとらふゆふあふ—— 音

あふふの御せうそこ

海より冷へて水せうそこつり

人目のうらあれハ海のまじりゆふのあふ

王命ゆとらうりふ

今夏盡の北うりふ可然人ありとて

まふふはるあふ

音

ふふふんれあれ

海よりまふ帰(のふの)なりとて

ふふりりゆれ

今夏まふあふあふ本の北あふ

源

いけふまのれのもをん時うううやうりあう

まふとやう

まふまふむれまふいつあひまふと

あふ時うううううううう

さうれらうりゆえさう

秘らうりゆえさううううううう

音

あふあふ

まふゆの北へきうせなり

あふあふにらうりあふ

冷のあふれらうりあふあふあふあふ

は時ハあふあふかりに

にうりう

まふゆのあふへり

あふ中あふへりハあふあふ

帝ううハあふあふ

秘冷の御印(あふ)あふあふあふ

りのううあふの北うり

秘王あふの

あふあふあふ

まふりあふゆのらうりまふあふあふ

あふあふあふあふあふあふ

あふあふあふ

まふあふあふあふあふあふあふあふ

あふあふあふあふあふあふ

海のうりあふあふあふあふあふあふ

あふあふあふあふあふあふ

あふあふあふあふあふあふ

あふあふあふあふあふあふあふあふあふあふ

あふあふあふあふあふあふあふあふあふあふ

あふあふあふあふあふあふあふあふあふあふ

あふあふあふあふあふあふ

秘あふあふあふあふあふあふあふあふあふあふ

あふあふあふあふあふあふ

あふあふあふあふあふあふ

あふあふあふあふあふあふ

あふあふあふあふあふあふあふあふあふあふ

あふあふあふあふあふあふ

あふあふあふあふあふあふあふあふあふあふ







此の如く御流をわたりし事くらむへくみえり  
 母更衣よりあれはひた露のうへに  
 七葉の程よりつひは内裏のうへに  
 此の如くは

海のほとり  
浜ありありと  
生

せんとうさくせんめい各店  
 いまうて宿屋の半り

つゝこれ奏とよめとるなり

うゝわゝりていらゑやきせを  
たぬれいらゑやきせゝゝりて

源の御徳をまねるやうなるといふ

世ゆきりて

と  
懐  
懐  
目  
記  
之  
為  
文  
の  
た  
の  
所  
々  
なり

これ 終る 事 なく あり しかば 爲 あり けり 尸 海

ふゆはとこふゆあ

めとてうひまんとあひいふ　せのうらやう

ふたつと海にまゐりてあなづきそとふと

ほりんどう  
せのあひし

ふりふりふりふり  
ふりふりふりふり

うねのうへりねり

秘  
五日未下 句 音

しん

源の縁のうろこ

月  
い  
ろ  
み  
ろ  
ろ  
ろ

祝  
々々々々々々々々々

五  
源の初

いふちのふみ

そわれはそふりふ

るれりん事とてなて源のつて

わらうてゝあに世を  
涙のうちに思ふ事とさう

五、

老  
源氏のふみの又と空とふ

えうとそくさあさくそくさく

う海女つハ女をあらうまあらう

一、此二字六部中均有之

私に  
あ  
れ  
る  
と  
あ  
る

いづれをのうれとふて發りつゝいぬ所へ入りくまらきなる

或抄大なるに後物の前よりよりみあやうきとれり

流るゝとろゝあゝとけ  
 砌はいりやうれあき  
 られあゝとろゝ

魚を喰ふに如く人を喰ふ







るはつはわ〜〜〜とありてし  
あつえのいひりゝあは の 後播連良羅法師寄る。

〜このあつへのき〜とありてきあふもいゝあつ  
とわりはあつはわ〜とありてきあふもいゝあつ  
一説云海軍播連は播連といふあり首はあつは播連と云ふ  
無と海軍の時伊勢とあつて大和船と云ふて播連あつはあつ  
き〜とありてきあふもいゝあつ  
目ふ入あ〜とありてきあふもいゝあつ  
それ〜とありてきあふもいゝあつ

細 夢まぬあつへの旅館〜とありてきあふもいゝあつ  
と〜とありてきあふもいゝあつ  
〜とありてきあふもいゝあつ  
の 楚屈原く〜とありてきあふもいゝあつ  
楚辭 漁父序 曰漁父者屈之所作漁父避俗時遇屈原恠而同  
之遂相應答屈原既放身舟遊江澤戲水側行吟澤畔 屈荊棘也

顔色憔悴 杜詩注曰屈原有宅在歸別 後漢書群臣

志注曰荊列記 梓歸縣北一百里有屈平故宅方七須累石為  
屋基今地名平

の 海は八柱之屋原に潭〜とありてきあふもいゝあつ  
は外流刑と〜とありてきあふもいゝあつ  
の 海原と〜とありてきあふもいゝあつ  
屈原と〜とありてきあふもいゝあつ  
但屈原と〜とありてきあふもいゝあつ

の 伊勢也 の 伊勢也  
〜とありてきあふもいゝあつ  
〜とありてきあふもいゝあつ

伊勢物語のや〜とありてきあふもいゝあつ  
あつれ〜とありてきあふもいゝあつ  
〜とありてきあふもいゝあつ

ゆ〜とありてきあふもいゝあつ  
十一月中長至夜二千里



外遠行若為拙者楊梅館冷枕草床一病身 白氏文集

伊勢大 二の里外随の李 十九年同任轉蓬 在昌賦漢武

兼 二の里外随の李 次方(の程十二の里くくうなるも

二の里れ花するところいふあられ 秘日

秘はハニの里斗しとて

いのちけしとあへく 兼 源のくもくくくくくくく 秘日

このゆめくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

源 少きとくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

秘 ありくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

日くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

秘 古くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

秘 ありくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

秘 ありくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

秘 ありくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

秘 ありくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

秘 ありくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく



ふわりあは

夢

やれあはれいやりうり面白

魚さあはれ風流なう海くあはれなり

花形あはれ配あはれ月とさうやといふうり解り 夢は秘日

は月頭基中納まの流とせ継あはれいりや

らさあはれいさ

秘市鎮のまはれ

義す源の流あはれられとて次すはれあはれ

あはれとてあはれ

れ次すはれとてあはれ

うさうのあはれ

新橋すうみ良流現はありやう

うさうのあはれ

あはれとてあはれとてあはれとてあはれあり

良流とてあはれとてあはれとてあはれとてあはれ

うさうとてあはれとてあはれとてあはれとてあはれ

あはれとてあはれとてあはれとてあはれとてあはれ

時のあはれあはれとてあはれとてあはれとてあはれ

あはれとてあはれとてあはれとてあはれとてあはれ

あはれとてあはれとてあはれとてあはれとてあはれ

ははれとてあはれとてあはれとてあはれとてあはれ

あはれとてあはれとてあはれとてあはれとてあはれ

秘振舞のまはれ

あはれとてあはれとてあはれとてあはれとてあはれ

あはれとてあはれとてあはれとてあはれとてあはれ

あはれとてあはれとてあはれとてあはれとてあはれ

あはれとてあはれとてあはれとてあはれとてあはれ

あはれとてあはれとてあはれとてあはれとてあはれ

あはれとてあはれとてあはれとてあはれとてあはれ

あはれとてあはれとてあはれとてあはれとてあはれ

あはれとてあはれとてあはれとてあはれとてあはれ

あはれとてあはれとてあはれとてあはれとてあはれ

年月とてあはれとてあはれとてあはれとてあはれ

あはれとてあはれとてあはれとてあはれとてあはれ

あはれとてあはれとてあはれとてあはれとてあはれ

あはれとてあはれとてあはれとてあはれとてあはれ

あはれとてあはれとてあはれとてあはれとてあはれ

あはれとてあはれとてあはれとてあはれとてあはれ

あはれとてあはれとてあはれとてあはれとてあはれ

あはれとてあはれとてあはれとてあはれとてあはれ

あはれとてあはれとてあはれとてあはれとてあはれ

あはれとてあはれとてあはれとてあはれとてあはれ

あはれとてあはれとてあはれとてあはれとてあはれ

あはれとてあはれとてあはれとてあはれとてあはれ



花邊より心のかたまりに心をうつす物こそいふてはる  
女心のあやうさなり

まふれ中津 冷泉

りてふ 夕音にわたりてあゝ海はしりしに  
二葉花へそそり ちよとて

ちよとてふ人こそや他はふとのちよとてふ人こそ  
入るふとて ちよとて

ちよとてふ人こそや他はふとのちよとてふ人こそ  
ちよとてふ人こそや他はふとのちよとてふ人こそ

源 花邊の海より心のかたまりに心をうつす物こそいふてはる  
ちよとてふ人こそや他はふとのちよとてふ人こそ

ちよとてふ人こそや他はふとのちよとてふ人こそ  
ちよとてふ人こそや他はふとのちよとてふ人こそ

ちよとてふ人こそや他はふとのちよとてふ人こそ  
ちよとてふ人こそや他はふとのちよとてふ人こそ

しんとふあつれり ちよとてふ人こそや他はふとのちよとてふ人こそ

ちよとてふ人こそや他はふとのちよとてふ人こそ  
ちよとてふ人こそや他はふとのちよとてふ人こそ

ちよとてふ人こそや他はふとのちよとてふ人こそ  
ちよとてふ人こそや他はふとのちよとてふ人こそ

ちよとてふ人こそや他はふとのちよとてふ人こそ  
ちよとてふ人こそや他はふとのちよとてふ人こそ

ちよとてふ人こそや他はふとのちよとてふ人こそ  
ちよとてふ人こそや他はふとのちよとてふ人こそ

ちよとてふ人こそや他はふとのちよとてふ人こそ  
ちよとてふ人こそや他はふとのちよとてふ人こそ

ちよとてふ人こそや他はふとのちよとてふ人こそ  
ちよとてふ人こそや他はふとのちよとてふ人こそ

ちよとてふ人こそや他はふとのちよとてふ人こそ  
ちよとてふ人こそや他はふとのちよとてふ人こそ

ちよとてふ人こそや他はふとのちよとてふ人こそ  
ちよとてふ人こそや他はふとのちよとてふ人こそ



北橋新寺後  
與子去娘

衡月夜

秘  
御月夜の御ふりあり

中納言君の御女房のらうりこまのりくのやうに  
うして中は御女房のらうりこまのりくのやうに

中々

福乃之

一

秘  
是る人の習

[illegible]

あり又ハ申納エのこ人のみぢんといふかこりうぬ  
ちぢやくわしといひいとうてつり

白浪を立ち上りて舟のうへへんをう

秘之石門之義也

あまゑ

私を秘す我知へし下白紙やと申すは影さうしきふや  
美は法不ひとの朱点を是は夕氣次子明ふれき可と書紙  
のひかりせざるなりやうれ事と又白紙とある事あると

海客子

義方弟子記

人後

秘  
致仕之序

大敵 同云 大敵をうへとも大敵といふ所ありりや 一動も  
 いづれも毎日さうして大敵へも敵くみえさうさへ  
 宰おのれとも 夕方れありし

私大友の幸ねの光のこゝろをうるふ友へも又わり  
幸ねのふれりこゝろも又わりのり

此子乃人子也

夕旁にふつふときね折とねねを

源の字のふもとに御月夜夜をうへにふのやうにとりか



地活のりてみき

名之ハ源ノ生景

調(たづな)ふふふふ

之海

りなつて居る

今更に其の如く

世よあはれ人の世よ

とありしかるを以て終より之を奉れと

27

義孝

新嘉坡の風景

22

乃歸家といふことあり

何ハカアキル水ハ志何カクウカニセリ

とるにせよ源のふとあり

いのち

多しの取ものめ

此よりわたり  
 是は常れ  
 秋後より  
 くらさるる

乞 儀のうりあふふ

かゝるに等しい

源直衣領ととつととみ終と















此の  
城よりこれよりとて其の如く其のつたえと戦ひてやゝな  
原居くと役の名よりそのあつたる句にあけさへいふなり  
とかなとやうといふれ役なりとせしむ

このころは

月あ

今東後撰のちとわつてゐる  
 風といふもの煙のちとてふ紙より其のうしろを越つた  
 心後撰

今東後撰のちとわゝてゝゝ

長 秘  
 何そおのれゆゑとあそとし何人しはそと

語やゝあやうくおつんとあつたるをかんはさるゝは境や  
 痛く煙のうしろ人泣きと解れさるゝやうなうしろ人泣きとわ  
 くゆりうしろうしろとたり

その浦の神

人つ魚を要するはそれ人語やとあやうふりんとあや  
 うよの語よりれたまふ人あふもたうくゆりふひるとし  
 ちと海人と語はけしむるうりも世あるつひの海とよとるう  
 ちとるはかうくせことと  
 秘 ちと海と語はけしむるうりも世あるつひの海とよとるう  
 ちとるはかうくせことと

秘、  
うね、  
そ、  
ふの、  
うね、

便の痛居のあつれあふまゝとあつて  
 今さうなうやうあれ  
 尸といふあつてゐるあれ

中納言云の中あり  
うたふ人あり

中納言の忍れぬる中みづれぬ

あなはなはな

源の生と漸のちりたけくを

中納言のふし  
移ししうよひ  
うつかり

あつれとろろ

源のそ

しらべ

源の勝のちとろく

昭王御文

一  
 二  
 三  
 四  
 五  
 六  
 七  
 八  
 九  
 十  
 十一  
 十二  
 十三  
 十四  
 十五  
 十六  
 十七  
 十八  
 十九  
 二十  
 二十一  
 二十二  
 二十三  
 二十四  
 二十五  
 二十六  
 二十七  
 二十八  
 二十九  
 三十  
 三十一  
 三十二  
 三十三  
 三十四  
 三十五  
 三十六  
 三十七  
 三十八  
 三十九  
 四十  
 四十一  
 四十二  
 四十三  
 四十四  
 四十五  
 四十六  
 四十七  
 四十八  
 四十九  
 五十  
 五十一  
 五十二  
 五十三  
 五十四  
 五十五  
 五十六  
 五十七  
 五十八  
 五十九  
 六十  
 六十一  
 六十二  
 六十三  
 六十四  
 六十五  
 六十六  
 六十七  
 六十八  
 六十九  
 七十  
 七十一  
 七十二  
 七十三  
 七十四  
 七十五  
 七十六  
 七十七  
 七十八  
 七十九  
 八十  
 八十一  
 八十二  
 八十三  
 八十四  
 八十五  
 八十六  
 八十七  
 八十八  
 八十九  
 九十  
 九十一  
 九十二  
 九十三  
 九十四  
 九十五  
 九十六  
 九十七  
 九十八  
 九十九  
 一百

二葉もろろのうはなをみたり

今にふりかへりてあまたの涙あり又わづらふ

是  
人乃臣心袖より人々浪海隔つるをかれ

秘 乾  
ふれ衣と袴を下げたるの井物をくさへし物なせり  
是より移のふれ衣なり又いふとこの井物をくさへし物なせり



と下へあつて

<sup>奥</sup> 居るに袖より浪海へうつる位なところあり

物の多しあつて海 <sup>秘</sup> 下へ流る衣裏とあり

<sup>秘</sup> 二重にうりたる海へ流る衣裏とてより流る物の多しとあり

またもの多し流る海へあつてとあり

秘 ありは袖よりつゝひさかしく袖へへん入るもの  
こまれの流るけしきあり

何事とらるゝとあり <sup>秘</sup> 是とと袖へきくと流るものあり

いふにしとあり <sup>秘</sup> 今へは流るものありとあり

海へきとあり

あやとあり <sup>奥</sup> 是とと流るものありとあり

あやとあり

秘 是とと袖へきくと流るものあり

あやとあり <sup>秘</sup> 是とと袖へきくと流るものあり

あやとあり <sup>秘</sup> 是とと袖へきくと流るものあり

やとあり <sup>秘</sup> 是とと袖へきくと流るものあり

秘 是とと袖へきくと流るものあり

秘 是とと袖へきくと流るものあり

秘 是とと袖へきくと流るものあり

秘 是とと袖へきくと流るものあり

人なれとあり <sup>奥</sup> 是とと袖へきくと流るものあり

おととあり <sup>秘</sup> 是とと袖へきくと流るものあり

おととあり <sup>秘</sup> 是とと袖へきくと流るものあり

おととあり <sup>秘</sup> 是とと袖へきくと流るものあり

おととあり <sup>秘</sup> 是とと袖へきくと流るものあり

おととあり <sup>秘</sup> 是とと袖へきくと流るものあり

おととあり <sup>秘</sup> 是とと袖へきくと流るものあり

おととあり <sup>秘</sup> 是とと袖へきくと流るものあり

おととあり <sup>秘</sup> 是とと袖へきくと流るものあり

おととあり <sup>秘</sup> 是とと袖へきくと流るものあり

おととあり <sup>秘</sup> 是とと袖へきくと流るものあり

おととあり <sup>秘</sup> 是とと袖へきくと流るものあり











（きり）つるやよめくまわぬ

涙が

息をとりし

よの紫ろくやゆへ

よききみ代あり

かきとくあふき

涙のみの親しきふくみきり

くちてふりあふゆへハ母まへに信や伊豫へりるき

のゆへにふりあふきひらきふり

はきり

よききみあふの親おあふ

ひりし神とふりあふききり物とあふりあふき

あふの詞をとりあふ

ねえひきいさふききり

あふのききりあふきり伊豫へ信とあふき

源

いそへの涙のうへあふきりあふきりあふきりあふきり

風俗・伊豫へ 或は伊豫へりる物とあふきりあふきり

いさひとあふききりあふきりあふきりあふきり

あふはあふきりあふきりあふきりあふきり

あふはあふきりあふきりあふきりあふきり

あふはあふきりあふきりあふきりあふきり

源

あふはあふきりあふきりあふきりあふきり

あふはあふきりあふきりあふきりあふきり

あふはあふきりあふきりあふきりあふきり

あふはあふきりあふきりあふきりあふきり

あふはあふきりあふきりあふきりあふきり

あふはあふきりあふきりあふきりあふきり

あふはあふきりあふきりあふきりあふきり

あふはあふきりあふきりあふきりあふきり

あふはあふきりあふきりあふきりあふきり

あふはあふきりあふきりあふきりあふきり

あふはあふきりあふきりあふきりあふきり

あふはあふきりあふきりあふきりあふきり



私の成れり〜 始の成て能れ

わしとてなる所のそのことありてしげくも病の〜 何とてなる

秘 びられ祈ふに教皇のふり〜 何とてなる所の祈といふ

わられし下白〜 何とてなる所の祈といふ

のれに成りし〜 何とてなる所の祈といふ

秘 びられ祈ふに教皇のふり〜 何とてなる所の祈といふ

わられし下白〜 何とてなる所の祈といふ

のれに成りし〜 何とてなる所の祈といふ

秘 びられ祈ふに教皇のふり〜 何とてなる所の祈といふ

わられし下白〜 何とてなる所の祈といふ

のれに成りし〜 何とてなる所の祈といふ

秘 びられ祈ふに教皇のふり〜 何とてなる所の祈といふ

わられし下白〜 何とてなる所の祈といふ

のれに成りし〜 何とてなる所の祈といふ

秘 びられ祈ふに教皇のふり〜 何とてなる所の祈といふ

わられし下白〜 何とてなる所の祈といふ

のれに成りし〜 何とてなる所の祈といふ

秘 びられ祈ふに教皇のふり〜 何とてなる所の祈といふ

わられし下白〜 何とてなる所の祈といふ

のれに成りし〜 何とてなる所の祈といふ

秘 びられ祈ふに教皇のふり〜 何とてなる所の祈といふ

わられし下白〜 何とてなる所の祈といふ

のれに成りし〜 何とてなる所の祈といふ

秘 びられ祈ふに教皇のふり〜 何とてなる所の祈といふ

わられし下白〜 何とてなる所の祈といふ

のれに成りし〜 何とてなる所の祈といふ

秘 びられ祈ふに教皇のふり〜 何とてなる所の祈といふ

わられし下白〜 何とてなる所の祈といふ

のれに成りし〜 何とてなる所の祈といふ



わろきん ねちやけふのあつらん 印とやうに  
ふれあうりーを 秘 海ゆふを

は後高代の政をうりうりきき海にききわうりーを  
ねふふ 秘 海ゆふを

ふれあうりーを 秘 海ゆふを  
は月夜内へ入りねふふは海へさそふ海へさそふ  
のれふふ 秘 海ゆふを

いふりー 秘 海ゆふを  
わりー 秘 海ゆふを

ふれあうりーを 秘 海ゆふを  
ふれあうりーを 秘 海ゆふを

ふれあうりーを 秘 海ゆふを  
ふれあうりーを 秘 海ゆふを

ふれあうりーを 秘 海ゆふを  
ふれあうりーを 秘 海ゆふを

ふれあうりーを 秘 海ゆふを  
ふれあうりーを 秘 海ゆふを

ふれあうりーを 秘 海ゆふを  
ふれあうりーを 秘 海ゆふを

ふれあうりーを 秘 海ゆふを  
ふれあうりーを 秘 海ゆふを

ふれあうりーを 秘 海ゆふを  
ふれあうりーを 秘 海ゆふを

ふれあうりーを 秘 海ゆふを  
ふれあうりーを 秘 海ゆふを

ふれあうりーを 秘 海ゆふを  
ふれあうりーを 秘 海ゆふを

ふれあうりーを 秘 海ゆふを  
ふれあうりーを 秘 海ゆふを



世中こそあつてつあつて

帝れは月かたり

<sup>第4の</sup>帝れは月かたり年れは月かたりふせのうらめしきとらふは月かたり

くくく世はあつてつあつて

帝れは月かたり年れは月かたりふせのうらめしきとらふは月かたり

たつたあつてあつてつあつて

いふはあつてつあつて

帝れは月かたり年れは月かたりふせのうらめしきとらふは月かたり

られたあつてつあつて

帝れは月かたり年れは月かたりふせのうらめしきとらふは月かたり

私源のうらめしきとらふは月かたり

いふはあつてつあつて

帝れは月かたり年れは月かたりふせのうらめしきとらふは月かたり

帝れは月かたり年れは月かたりふせのうらめしきとらふは月かたり

<sup>第4の</sup>帝れは月かたり年れは月かたりふせのうらめしきとらふは月かたり

いふはあつてつあつて

の月かたり年れは月かたりふせのうらめしきとらふは月かたり

あつてつあつて

私源のうらめしきとらふは月かたり

いふはあつてつあつて

帝れは月かたり年れは月かたりふせのうらめしきとらふは月かたり

いふはあつてつあつて

帝れは月かたり年れは月かたりふせのうらめしきとらふは月かたり

いふはあつてつあつて

いふはあつてつあつて

<sup>第4の</sup>帝れは月かたり年れは月かたりふせのうらめしきとらふは月かたり

いふはあつてつあつて

いふはあつてつあつて

いふはあつてつあつて

帝れは月かたり年れは月かたりふせのうらめしきとらふは月かたり

いふはあつてつあつて

いふはあつてつあつて

帝れは月かたり年れは月かたりふせのうらめしきとらふは月かたり

いふはあつてつあつて

帝れは月かたり年れは月かたりふせのうらめしきとらふは月かたり

いふはあつてつあつて



夢

心

世にあらざるを

何れと云ふに

私ハ一服ハアミの件ともう入る

次丁よりいへる

秘  
傳  
の  
た  
ま  
ご

美

海島丘一帯今れ

初  
前上海の新聞を  
今日見た

五

漢

此の五十年と  
 二百年の時  
 中納言

七

忠見

文能くお返し  
 るや美草草下  
 ヒウク山サハエカ  
 セリそ草下  
 ひととそ其六







今れなくは

源のくゝ源のくゝ源のくゝ源のくゝ源のくゝ

夢  
源一人也

養  
 海のうきとふとふ

君をいふを  
 涙のうへに  
 あつてゐる  
 心をいふ  
 ことあり

初ハ何れと  
今もあさめめわくわくあり

多しと云ひ  
是れの本を

海内  
繪事  
以  
繪墀  
繪合  
之

絵合の席外

風のおりそとて

河  
扉凡乃表裏を境ありと云

御多由物語ハ往ノミ所長ヨ月ノウリ御集聖ノミトモ  
或説云ク多由文ハ往ノミ所長ヨ月ノウリ御集聖ノミトモ  
為文説ハ往ノミ所長ヨ月ノウリ御集聖ノミトモ  
モ多由物語ハ往ノミ所長ヨ月ノウリ御集聖ノミトモ

よりて 絵と 面と 何と 来と 有と 之 促と 之 之 東也

新麻凡の面の本  
後所小沙汰  
付義志ひく沙汰  
そくよ及はさるるれ

今れうきぞ

あまふはふとて  
うきをうき

ところより、わづらうのふと、いひ出るなりと、同  
 志の人の必命と、ゆる海にあり、ふゆをいと悲嘆せうせ  
 て、ゆるいのは、水陰い、うさうせ、流りんとあり、けき、乃  
 次の月、は、絵のふ、何とつゝあうり、看尾お、趣と、う、本に  
 新を、花、ふ、い、り、そ、や、ら、う、そ、て、人、を、流り、お、い、と  
 わり、二年、以下、の、守、わ、く、の、う、あ、り

秘  
若菜をよひ水強いうくゆうせぬえとう年

不世榮子之傳

にふくろね破のあてすひあ

あまのこ  
いふに  
なほうと

けりといふ所へていなり彼の結よりいあらざるあり  
はこれよりよきものなり

秘千枚巻則若翁師

千枚常則名在錄

共益工也

宣和元年九月九日御記玄古堂



赤川志飛鳥常則翁蓋西廂南壁 白澤王像 常則名字天曆師

當時これ法に系為りて一日中のやうに名人を法と

けりてつづきなりせ 作法 新後記

はなり法といふと然るなりと源氏なりと

法と後世よりなりとせり 新文の蓋師に傳ふこと

源氏の蓋とこと法師は又とせりといふ説不可然と

なりと法なりととせりといふなり

今源のこころは蓋と法なり今なりは法法師なりといふなり

の法とこととせりといふなり 海流いこと

あり 蓋の 法と然るなりといふこと 事なり

また法にひくふこととせり

仙源は何なりととせりといふこと 法の

なりと然るなりといふこと 事なり

いりいり

ありいりいり 海の ありいりいり 海は

つづきとれいりいりいり 海は

のせりいりいりいり 海は

ありいりいりいり 海は

せん 蓋の ありいりいり 海は

ありいりいり 海は

ありいりいり 海は

ありいりいり 海は

ありいりいり 海は

ありいりいり 海は

ありいりいり 海は

ありいりいり 海は

ありいりいり 海は



お逢ふ人々もきあはれとてわづらひきつるをさへおやうあ  
御衣衣の衣れ衣衣地へ年清乃を夜あつてわれ又いふを田  
鈴よりりて用るる花田あふまのそれとておやうあつて  
<sup>秘</sup>花鳥よあふまのそれとておやうあつて  
<sup>秘</sup>花鳥よあふまのそれとておやうあつて  
花鳥よあふまのそれとておやうあつて

秘 三光月夜あつて花鳥あつて何とておやうあ

おやうあつて

おやうあつて

本朝又釋教文

天迦年尼佛弟子某歸命頂礼白佛言天菩提道樹之月氣源  
沙羅之慈云云連河之水音咽蹙提之淚浪

ゆきゆきとていふ

管弦曲の拍子あ

後急火のり

秘 今剛佛子某あつて

秘 今剛佛子某あつて

二巻あつてあり佛弟子に部の子をたれ候とてあり

に部の子に後海塞あり

秋の月夜あつて

ゆきゆきとていふ

秘 今剛佛子某あつて

おやうあつて

秘 今剛佛子某あつて

秘 今剛佛子某あつて

唱歌云々

秘 雁陣易迷秋嶺と 鳥亦難分夕陽中

鳥亦難分夕陽中 鳥亦難分夕陽中

神次生鳥磐椽樟船神

亮あつて出る御舟

おやうあつて

おやうあつて

おやうあつて

おやうあつて

おやうあつて

おやうあつて

雁陣易迷秋嶺と 鳥亦難分夕陽中

雁陣易迷秋嶺と 鳥亦難分夕陽中

雁陣易迷秋嶺と 鳥亦難分夕陽中



られとハ  
い  
為樽といひく為の釜といか樽と云ふ

今更に御  
藤相なる念珠の祈り

くのもうまうま

[illegible]

乃の契れあきさるるをくふ人の類とて

又云月人又あつた  
るるれを物とす  
すれあふき

のふくもとよりあきとハ琴をたたくあはれ

くをりるるる人よ頼るるるに元ふハ定起音

我為遷客汝來賓  
共是蕭蕭旅漂身  
欽枕思家淚  
去日我如何

歲次明春  
支雁落家後集  
和詩  
及

つねに、これこそおのれが居る所の世である。ねえ、  
おれもきつねも、あつめあつめのつねに、おれも、けなす。

旅のやうな友のやうなふるさとを

しつれもみせもあつたの夢よう花の定めて公衆と  
りふさうくとをり

氏ア五捕  
秘  
惟  
氏ア五捕

あゝと云ふのうそをいひまうか

家入の事を思ふに  
 くるくるととて  
 けふはあつた  
 日

秘  
旅の月を

藤乃と月家へありてふやうにと  
解れりありたりとし

二  
 三  
 四  
 五  
 六  
 七  
 八  
 九  
 十  
 十一  
 十二  
 十三  
 十四  
 十五  
 十六  
 十七  
 十八  
 十九  
 二十  
 二十一  
 二十二  
 二十三  
 二十四  
 二十五  
 二十六  
 二十七  
 二十八  
 二十九  
 三十  
 三十一  
 三十二  
 三十三  
 三十四  
 三十五  
 三十六  
 三十七  
 三十八  
 三十九  
 四十  
 四十一  
 四十二  
 四十三  
 四十四  
 四十五  
 四十六  
 四十七  
 四十八  
 四十九  
 五十  
 五十一  
 五十二  
 五十三  
 五十四  
 五十五  
 五十六  
 五十七  
 五十八  
 五十九  
 六十  
 六十一  
 六十二  
 六十三  
 六十四  
 六十五  
 六十六  
 六十七  
 六十八  
 六十九  
 七十  
 七十一  
 七十二  
 七十三  
 七十四  
 七十五  
 七十六  
 七十七  
 七十八  
 七十九  
 八十  
 八十一  
 八十二  
 八十三  
 八十四  
 八十五  
 八十六  
 八十七  
 八十八  
 八十九  
 九十  
 九十一  
 九十二  
 九十三  
 九十四  
 九十五  
 九十六  
 九十七  
 九十八  
 九十九  
 一百

乙 襦ふしそしうてう居し何そあやえわぬ子細のふそ  
 しそ毎ひあそんしそあそ

評説は局の常世といふ猿よれゝあまのな家へゝあ

丁をわれん事ゆゑにこれをたふしと

かゝることを承知し、  
あつたところを念及して、

[illegible]



心  
 やとふに仙院とより玉林のうりやありて老母を  
 局ふふ世の世くあらうふふよそむあらうく  
 ねむ所常世のより何よくらへ略く

うねのちのせう

和  
ろに海を  
あつちへ

三

いさの名をせうと八反との御簡とまうまうね

あふふふ

とて庭りて旅のやあるりりし御もはるまじき程をいふ  
 海のとておりしなほさうさむしはるまじき程をいふ

馬

傍にありて

なまるとつてはいふ

心友とてあふてふれ初めて考之

糸  
尾のつゝななる友とまゝとつてはいつあゝといつあり  
あれ友とまゝとつゝさるゝあゝあゝといつさるゝ

知

友とうあひていらふを  
なほとくをたもて  
しほふをとし

十

是も傍穿れ津より久しく  
初云身も我ハ父ノ常陸ノ

そらりーみさうそつれどて糸うゝるもいふあり

ふれとあの日より  
親類兄弟とそとあはれなき

もあふたうとくを秘の氣にへ

無

たをせうり足のうしろに伊ちう才あり

祖

源よりあひはるる  
新と新や此の如くはと云

ハタヒツキニシテ又ハ常陸ノアリテ下アリト

あり相違希 朋誼此年 為懐念に似たり

うそつれ

夢

久字の湯と云ふはよふやけ

ひたすのせう 親親足すところにて衆の源への忠告なり

そふじもあのをふふふ

さよありひさうへつせんとうふりてあそびをさう

何々

右通の趣を親親と云々あり云々

下より一版速書たりと云ふに殊文より云々をけぬ

あつと

心身より清く正しくありてを

とほよ敵とんと闘ふとつて敵とて色に以て別れをぬかぬ

月のひかり

新定曲  
りておろし  
き盤に記す

そにやうな月のけしきあるところ各月とそふわり

しるはの月をく

こゝに十人ありきり

和歌 乙未八月十五夜



て約まうけけりやうなる人——約弁管絃乃御越命の儀  
 一々秘して多々秘しては此月れ——あていさや京元月と御元  
 あて十々秘して——あていさや京元月と御元  
 ひきと秘してあていさや京元月と御元  
 多々秘して——あていさや京元月と御元  
 うれ秘して——あていさや京元月と御元  
 の御衣今うにありと秘して八月十々秘して——あていさや京元月と御元  
 多々秘して——あていさや京元月と御元  
 秘とれあていさや京元月と御元  
 月のかれとありと秘して——あていさや京元月と御元  
 秘とれあていさや京元月と御元  
 二子里介あていさや京元月と御元  
 秘詩八百五十八月十々秘して——あていさや京元月と御元  
 うすうに約の百し今交殿との首越とありと秘して——あていさや京元月と御元  
 うすうに約の百し今交殿との首越とありと秘して——あていさや京元月と御元  
 こみ秘——あていさや京元月と御元

あていさや京元月と御元  
 通文のきりやありと秘して——あていさや京元月と御元  
 秘秘のきりやありと秘して——あていさや京元月と御元  
 いさや京元月と御元  
 秘秘のきりやありと秘して——あていさや京元月と御元  
 うすうに約の百し今交殿との首越とありと秘して——あていさや京元月と御元  
 うすうに約の百し今交殿との首越とありと秘して——あていさや京元月と御元  
 こみ秘——あていさや京元月と御元



林をよふ旁屋へうつゝあつたれ命をけりけりけり

しり物結

林をよふとて

院ふれり

朱茂の相違ふ似たり

けしきやうれぎふ

の去年今秋待遠秋懐詩篇他勅賜

賜賜御衣今在此捧持毎日拜録焉 後集

新衣是重き御衣付あて去年内裏あて九月九日喜ふ

秀色のゆとりゆとり勅録御衣とゆとりとゆとり

してゆとりゆとりあてゆとりゆとり待て遠氏とて

御衣とゆとりゆとり事多しそれとありあて

ゆとりゆとり朱茂のゆとりゆとり御衣とゆとりゆとり

ゆとりゆとりゆとりゆとりゆとりゆとりゆとりゆとり

ゆとりゆとりゆとりゆとり朱茂ゆとりゆとりゆとり

ゆとりゆとりゆとりゆとりゆとりゆとりゆとりゆとり

ゆとりゆとりゆとりゆとりゆとりゆとりゆとりゆとり

ゆとりゆとりゆとりゆとりゆとりゆとりゆとりゆとり

去る八月十日あてゆとりゆとりゆとりゆとりゆとり

延在帝へゆとりゆとりゆとりゆとりゆとりゆとり

ゆとりゆとりゆとりゆとりゆとりゆとりゆとりゆとり

ゆとりゆとりゆとりゆとりゆとりゆとりゆとりゆとり

ゆとりゆとりゆとりゆとりゆとりゆとりゆとりゆとり

ゆとりゆとりゆとりゆとりゆとりゆとりゆとりゆとり

ゆとりゆとりゆとりゆとりゆとりゆとりゆとりゆとり

ゆとりゆとりゆとりゆとりゆとりゆとりゆとりゆとり

ゆとりゆとりゆとりゆとりゆとりゆとりゆとりゆとり

ゆとりゆとりゆとりゆとりゆとりゆとりゆとりゆとり

ゆとりゆとりゆとりゆとりゆとりゆとりゆとりゆとり

私職原抄とて奉府常筑前必

當唐名大都督府 聖武天皇天平十五年始置筑紫鎮西府

先是右太宰府号 天平宝字二年勅諸国司以に今年為

任限 宝龜十一年勅太宰府任限為五年に凡當府都落九



国二嶋別第筑第也 師 唐若都督相當從三位 勅任之

官也多是以有呂親王任之親王任之者權帥若古哉知府勢

而已 權帥 納之以上若前官任之中古以來例能正成者

擬親王官兼府勢人任權也或又任正依時宜欽為大臣之人

乃遷之時權必任而不可不府勢也凡於師者令條所定已為

高官仍重其仁雖幸族又任之 大貳 元權官相當從四位

下 唐若都督大卿 近代例多以系族散二三位等任之昨

系族に任文有之例有權帥者不任大貳任大貳者不任權帥

雖云之謂已為流例矣是以各家人任之 以下畧之

五節の父也元散里来より又節若より源氏ありし事より

又乃任之と云ふ事なり

子いむるにむすめありし事なり

此の節 其の女兄才ありし事なり

此の方ありし事なり

此の女兄才ありし事なり

此の女兄才ありし事なり

此の女兄才ありし事なり

此の女兄才ありし事なり

此の女兄才ありし事なり







いふところ

飛龍のく

きくところ

飛龍のく

秘

飛龍のく

飛龍のく

飛龍のく

飛龍のく

飛龍のく

飛龍のく

飛龍のく

飛龍のく

飛龍のく

飛龍のく

飛龍のく

飛龍のく

飛龍のく

飛龍のく

飛龍のく

飛龍のく

飛龍のく

飛龍のく

飛龍のく

飛龍のく

飛龍のく

飛龍のく

飛龍のく

飛龍のく

飛龍のく

飛龍のく

飛龍のく

飛龍のく

飛龍のく



と源  
よて源のほふあきてぬらんきうとうゝさるる半あまやか  
かそんとぬくのうらとくひしへ水前の人乃らふら  
うわりのむきさつめぬさうやをたれりやと海のもの  
無いわりこみお節けんとされぬわらんうゆりまうとこと  
筆  
うらとくよりはやうらとくよりきさうしといふあり  
あさうらとくよりやうらとくよりなりねんか思ふ字清濁いら

いさろちんとい

九

管うづまをみちをけりあり秘句

何  
 うきやうのうれはやうてあつたのうれはとん  
 ぱらーやう きよ ぱらりのうれはやうて

私之者半

三

者以酒

春

あひさうに

新

ふと声とせりて

いづれのおさふらう  
うさう  
人むわりきるゆふ  
てあらどゆり  
あゝくあんあやう  
ら  
大鏡才乙菅原相うるのかるは流るる

ふりかへるに播すれわしのしまやよるありはる  
よひやのあさひもあはるさぬあはるにふりかへる

譯長真學時愛及一第 一第是春秋

くしん御(御)あはれ

つぎよりてはより詩（白氏）文集に号綴ありて遊大林寺序

海に流るる物と云ふは  
日本紀より云ふに流るる物

ふとふりに適所といふを以て或は向待に句綴句に

わて一句時(みえふの信何うせうととて或みうとぞぞと

[illegible]

五と筆のりり  
 おと只待  
 句待のりり  
 乙未月

一  
 二  
 三  
 四  
 五  
 六  
 七  
 八  
 九  
 十  
 十一  
 十二  
 十三  
 十四  
 十五  
 十六  
 十七  
 十八  
 十九  
 二十  
 二十一  
 二十二  
 二十三  
 二十四  
 二十五  
 二十六  
 二十七  
 二十八  
 二十九  
 三十  
 三十一  
 三十二  
 三十三  
 三十四  
 三十五  
 三十六  
 三十七  
 三十八  
 三十九  
 四十  
 四十一  
 四十二  
 四十三  
 四十四  
 四十五  
 四十六  
 四十七  
 四十八  
 四十九  
 五十  
 五十一  
 五十二  
 五十三  
 五十四  
 五十五  
 五十六  
 五十七  
 五十八  
 五十九  
 六十  
 六十一  
 六十二  
 六十三  
 六十四  
 六十五  
 六十六  
 六十七  
 六十八  
 六十九  
 七十  
 七十一  
 七十二  
 七十三  
 七十四  
 七十五  
 七十六  
 七十七  
 七十八  
 七十九  
 八十  
 八十一  
 八十二  
 八十三  
 八十四  
 八十五  
 八十六  
 八十七  
 八十八  
 八十九  
 九十  
 九十一  
 九十二  
 九十三  
 九十四  
 九十五  
 九十六  
 九十七  
 九十八  
 九十九  
 一百

[illegible]

乙巳年  
五月廿五日

亭子乃所生也後有子也

故事のうそもなりけり此治の血ハ又都の流れてるを漢氏

の御方とておとほひまゐりおしめす候なりと

ゆふあはれハ口詩ヲ多ク入ル  
又花鳥虫魚

10

うそぢりぢりぢりくへれぢりひらけとてさあそびな

ゆゑに源氏物語はあらたなりとあり  
 ちかみ

秘

聖朝力申河海ふりてより  
ふくむ侍と聖廟ふくむ  
なり



ひけり〜うめ末代は清くつひけり〜てみ第〜うつゝ  
〜後代は〜とゆふ人き〜との後へ今この御消息と  
〜うめ末代は〜とゆふ人き〜との後へ今この御消息と  
あり〜とゆふ人き〜との後へ今この御消息と

うめ末代は清くつひけり〜てみ第〜うつゝ  
〜後代は〜とゆふ人き〜との後へ今この御消息と  
〜うめ末代は〜とゆふ人き〜との後へ今この御消息と  
あり〜とゆふ人き〜との後へ今この御消息と

うめ末代は清くつひけり〜てみ第〜うつゝ  
〜後代は〜とゆふ人き〜との後へ今この御消息と  
〜うめ末代は〜とゆふ人き〜との後へ今この御消息と  
あり〜とゆふ人き〜との後へ今この御消息と

うめ末代は清くつひけり〜てみ第〜うつゝ  
〜後代は〜とゆふ人き〜との後へ今この御消息と  
〜うめ末代は〜とゆふ人き〜との後へ今この御消息と  
あり〜とゆふ人き〜との後へ今この御消息と

うめ末代は清くつひけり〜てみ第〜うつゝ  
〜後代は〜とゆふ人き〜との後へ今この御消息と  
〜うめ末代は〜とゆふ人き〜との後へ今この御消息と  
あり〜とゆふ人き〜との後へ今この御消息と

きけり〜や

ありや〜や

ありや〜や

ありや〜や

この世乃わらひ〜や

あり〜や

あり〜や

あり〜や

史記云趙高欲為亂恐群臣不聽乃先設驗持鹿獻於二世曰  
馬也二世笑曰丞相誤耶謂鹿為馬向左右以默或言馬以阿  
順趙高或言鹿高因陰中諸言者以法秦始皇本紀







うきうきうきうき

惆然不能眠

紛々專衣雪

建和碧鮮所

家僕早逃散

千萬言於郊

連儒亦鳴咽

近看白屋裡

凌寒誰掃徹

良清唱弁

多々

秘  
氏部大補惟之

石の巻

六

源の琴より流るる水といふ

今  
 の  
 一  
 年  
 は

源の琴乃と感し

し  
胡のくまはつしうきんむと

王照

五

王熙臣胡のゆききんとあり河内方れたるく王熙臣

り  
胡必のふふあうへふあうへふあうへ

てふはなをうんそふわつちのきくかたよりれまゝに

いふはつてなまをうんとすゝめておるにたゞいかにあはれと

東小治よりつてめたるて有れ生とるまゝ人知るなり

秘

源のそ明妃ハ胡女ニシテ以テウチノ歌ハ都ノ女ニシテ捨

乙  
 凡ゆるくはるあり

この世にうむあり王無君うまはたの事。うまの事。うま  
琵琶と胡弓あり。うまあり。うまあり。うまあり。うまあり。

わんわん  
わんわん

乃ふいふふふふふふふふふ

和の後の美と云ふ一語

胡角一声

胡角一盡霜後爰漢宮  
万里月  
前腸  
王嫫君  
胡  
繆  
口  
淨  
乃  
正  
一  
血  
の  
源

と、謙く  
知く  
少く  
下和玉く  
と  
穀きり  
僻事く  
前より  
胡

のまよつとみんとおのりてとわつと鮎居る

第

胡角胡笳の和意（角笳ノ意）  
或抄胡角一声霜後爰

漢文可星月  
前腸昭君若  
贈黃金賂定  
是終身奉帝  
王

王照君  
胡居仁

月  
一  
あ  
う

五月 前 勝とあり

おきりてぬき

義字  
旅乃水戸の西へ

海のうへに雲をたてて

[illegible]



あまの侍。秋夜庭見春をいつてふてふつふや  
あられぬはひありと の 幾行南去雁一斤西顧月伊人

奥入とまゆゑ今来天共以不分明 眞寂柱芳半且田

二千世衆一周天 天廻玄鑑雲将霽是西行不左迁 菅家 代月暮

天廻——菅 月乃ゆさゆ 一動 月ハ初ハひとあハ不約

左ハ東より

天廻——月のゆさゆあり

あまの近ハ東より 玄鑑 といふ物とて——ゆあり

日月ハ初ハひとあハ不約 菅家 不左迁といふ菅家の天廻の  
名ハ初ハひとあハ不約

私劉元甫侍は題世事 世事不舒若莫嘆試看日月在

青天一般造化却相背日月右旋天左旋 日月ハ初ハひとあハ不約

正云ハ初ハひとあハ不約 造化といふ海らひとあハ不約は世事はね

遠る恨みありとて是も日月ハ初ハひとあハ不約といふは

つれづれはあまの近ハ東より 或抄 月ハ初ハひとあハ不約

源

秘

あまの近ハ東より 或抄 月ハ初ハひとあハ不約  
つれづれはあまの近ハ東より 或抄 月ハ初ハひとあハ不約  
つれづれはあまの近ハ東より 或抄 月ハ初ハひとあハ不約

あまの近ハ東より 或抄 月ハ初ハひとあハ不約

源

あまの近ハ東より 或抄 月ハ初ハひとあハ不約

あまの近ハ東より 或抄 月ハ初ハひとあハ不約

あまの近ハ東より 或抄 月ハ初ハひとあハ不約

あまの近ハ東より 或抄 月ハ初ハひとあハ不約

あまの近ハ東より 或抄 月ハ初ハひとあハ不約

あまの近ハ東より 或抄 月ハ初ハひとあハ不約

あまの近ハ東より 或抄 月ハ初ハひとあハ不約

あまの近ハ東より 或抄 月ハ初ハひとあハ不約

あまの近ハ東より 或抄 月ハ初ハひとあハ不約

あまの近ハ東より 或抄 月ハ初ハひとあハ不約



史記の祖

日不記ふはすこれ大蛇のう蛇うは八の墨八の草ふふひううと  
 うきう夢迄の二字とふひううとふううううううううううううう  
 月来しふふわううううううううううううううううううううううううう

良清、物長の入江のむすめを  
 明へ入道女と明へとのりあり  
 あは恋をくも良清のけなれり  
 とくうや、あは良清の父前橋  
 うちめくくくくくくくくく

やうなやりきんと  
ふりまゝさん  
秘  
女のさるあて父のさうりやうを  
秘  
はくしてあるうちに又と唇に連てうへに  
入るのふありひあつたふあり

りて入なり  
入道の良儀はあひこひひたすれあふとて  
とらふこきてもへきさうあえわうさふはやくはうとゆ  
うしうしうさふふきこもへき事あえわうとわうと  
あふあふの若きうの衆とてうさへきとあわ

けりてん 秘しをぬれぬといひてせうけんかう  
しつとといふこと 萬年 乙と良盾のうし

ふらふら  
そより入道のふゆとて

必<sup>秘</sup>ハ皆箇何のあふ<sup>一</sup>そある

たゞ此は入道のひるくははひるまゝあり

新當付の必めちハ良清の父ハあつたてお懃成とある  
 びた所のちあつてしを付たり良清のいひたりてめで  
 新しきとありてあり

このふておる  
はまのふておる

入石の水方よりくさくさ

うゑゝかゝぬ  
明ふの母入道の小方

きりけふれふ乃て  
私をくわふ

是ハ漢高祖ノ  
是ハ漢高祖ノ  
是ハ漢高祖ノ

吾子亦宿也

入道のしとめは牛どろふあり 舞白

明るゝのぬりけしんくろふさなうら

五ノ一ノ二ノ三ノ四ノ五ノ六ノ七ノ八ノ九ノ十



見とれぬか

養  
月秋のそと  
あき

みりしうしへく 乞師流に目下紀小妃とみあり流り  
白氏文集あり八十一御妻とあり但う紀のやうとあり  
御ありといふ多くとあり流ありといふといふきれうれそ  
人臣のゆゑなり

くもさうしあま　わうにさぬれふよあつさうと左衛門尉とく  
あゝわやしもさうしあま　何　史記高祖本紀曰呂公曰臣有息

あつたさうだ

何史記高祖本紀曰呂公曰臣有息

女願為季箕帚妾酒罷呂媼怨呂公曰始常欲壽比女子費人  
沛令善公求之不与何自妄与刘季呂公曰此非兒女子所知  
之卒与刘季呂公女乃呂后也孝惠魯元

入道乃後立所

秘入道乃後立所云

うゝ  
うゝ  
うゝ  
うゝ  
うゝ  
うゝ  
うゝ

秘  
愛  
世  
告  
あ  
る  
書  
日

萬の  
 多程と舞より何兒女れあふあはれとてさよふて別れ  
 うらとて人ゆゑさうれ別れとてさよふて別れ

うづあゝくも  
入道乃祈

入通乃祈

ふりふりつる  
ゆきとせよと  
ふ方はいひて  
ふる

あつひふをりれじををりてうけとこ  
なつひふをりれじををりてうけとこ

源の形よりてかりて聲はうんハ毎エのう

あうてむりともせうくはのふちをうぬ

ふとあんなり  
此跡をあらは後悔ありとて

うゑれいふは来りやう

通乃子也

入通乃子わ

和漢三才記

例として  
江戸時代  
の茶室

とありぬとて

市曆覽古今歌詩自風騷之後蘊李以還次及鮑許徒迄李杜

軍其必調人史知者累百詩牽流暢而作萬觀其所之自多因

終究逐征我行旅凍餒老病存沒別離情教中又形於外故

慎憂恐傷之作通計今古什八九焉也所謂文士多數奇詩人

乞命於斯見矣

白氏文集  
序名却

本朝其例多矣

野相公在納玄菟家西文左符滿肉大治以下拔群賢才玄龍











いゆる宰相

今ハ宰相おぼしめし

物ありしにき

二位中ねは海にゆきしとある朋友

くやふふうてふ中ねハ二条太政大臣れしとされん

うけしる所筆れしはわね時代のおりしつゝねと

よめありてはふあふと

兼て前ハ人貳のき

さういふ所のきとふしとては中ねのかりしと

明友は終わしきねはかりしとては中ねといふ

あふひねはあふとてはかりしとては中ねといふ

うらなう

宰相のふれ海とてはかりしと

うらなう

秘川二の月をたてしとあり 兼て二の月

うらなうきとてはかりしとては中ねといふ

うらなうきとてはかりしとては中ねといふ

うらなうきとてはかりしとては中ねといふ

うらなうきとてはかりしとては中ねといふ

うらなうきとてはかりしとては中ねといふ

うらなうきとてはかりしとては中ねといふ

うらなうきとてはかりしとては中ねといふ

うらなうきとてはかりしとては中ねといふ

うらなうきとてはかりしとては中ねといふ

うらなうきとてはかりしとては中ねといふ

うらなうきとてはかりしとては中ねといふ

うらなうきとてはかりしとては中ねといふ

うらなうきとてはかりしとては中ねといふ

うらなうきとてはかりしとては中ねといふ

うらなうきとてはかりしとては中ねといふ

うらなうきとてはかりしとては中ねといふ

うらなうきとてはかりしとては中ねといふ

うらなうきとてはかりしとては中ねといふ

うらなうきとてはかりしとては中ねといふ

うらなうきとてはかりしとては中ねといふ



王

五

部

困甚竟造之教丹朱

彈基後漢書梁龔挽滿彈注挽滿仇

R

7

子



方之與水  
又海濱  
抱石



九  
禪貝(海藻)  
馨物ハ則貝ノ半歟馨廣物ハ即是の大方々臭(馨)

九 禪 貝 海 藻 凡

御覽

人沈陽之入之也

海に舟をあらは

新立乃中岐の唐のそとよく家

わすれぬとていふもののやとていふものゝうら

そゝろとあゝえはる

秘  
あ  
れ  
う  
ろ

葉の  
 海生れ物いふ所とすあゝひねりねをよめることなりそれ  
 とそこへいふところあり

とそこくくあーいあう

なみしとあふとわす

新刊の多きものなり

ふたつちあふ<sup>に</sup>舞ふハせの中　ふたつちうそふ<sup>ふ</sup>あつて

あまのうやむさしをたふしハハクノ御宝をうやむさし

棄てて海へ  
やそけり月夜に  
うねりて波あはれ

又<sup>ハ</sup>そ<sup>レ</sup>ら<sup>レ</sup>れ<sup>ハ</sup>人<sup>ノ</sup>を<sup>シ</sup>め<sup>ス</sup>や<sup>ハ</sup>其<sup>ノ</sup>け<sup>レ</sup>を<sup>シ</sup>に<sup>シ</sup>め<sup>ス</sup>ゆ<sup>ヘ</sup>急<sup>ニ</sup>に<sup>シ</sup>て<sup>ハ</sup>宰<sup>ノ</sup>相<sup>ノ</sup>を<sup>シ</sup>

なまのび海人と申すそと新し  
ぬふあまへきうわ

或所のなりけり

五  
何  
か  
り  
と  
お  
あ  
と  
と  
あ  
あ  
あ  
あ

御  
う  
と  
あ  
と  
い  
は  
し

源や寧ねふ人の海へとりし物うけし

いふるゝなり

地ろけあそひに寄るひわりを

乳海人子極乃智德

ふくまふくま

やうなみづうなう

成州念ふをいふとらうきにあたりあふ

とつちをゆきふりてまう向祈ふ

秘  
倉やうとあるは  
練やうと

五

是祿なりとあり

稿  
 ( 乙 )  
 凡  
 所  
 以  
 合  
 之  
 者  
 也  
 故  
 而  
 已

あまのこはな

和  
ふに海をくろくろとまきくろくろとまきくろくろとまき

うねりうねりあはれ  
娑羅訶天馬食放香楸有尸昆索耶

わき舟下りてくみ

心  
飛  
鳥  
升  
八  
何  
鳥  
不  
足  
以  
云

くちりまよひのふとふとされみちをさるゝれはなほ



秘義書

是よりさういふ所へなりき

ワふなりき

美

夕暮れ何れかあておいてるさ海河

中宿のさうなりき

おくれわけられ

養れ父はうき方なりき

あつさうなりき

源のさうなりき

けさけさうなりき

秘義書

美

源の中將との所なりき

さうさうなりき

さうさうなりき

さうさうなりき

作人なりき

さうさうなりき

美

前よりなりき

おつさうなりき

さうさうなりき

さうさうなりき

中よりなりき

さうさうなりき

秘義書 養春盃裏 樂天

美

白ふさうなりき

さうさうなりき

いふさうなりき

さうさうなりき

秘

さうさうなりき

さうさうなりき

さうさうなりき

美

十一年三月廿日別微之於濃上十一年三月十一日也微之

決中偏舟夷陵之宿而別言不吾者以詩終之 七言十四句

一別五年方見面 諸到天明竟不眠 生涯共寄蒼海上

心小俱拋白日迎 往事渺茫都似夢 旧遊零落半成灰

醉悲川漲春盃裡 吟若与願曉燈前

不天漏所さうなりき

乃宰おちの対面さうなりき

新ふは二首れ詩の面けさうなりき

さうさうなりき

戸の浦の色あれは生涯共寄蒼海上もけさうなりき

わさうなりき



何言又去してあはれなるものぞ  
りり夢の痛く思ふなる人へ  
あはれ思ふ人へ

御さる人  
是は宰相お中ねのときとれ人へ

宰相の供の人へ  
是は宰相お中ねのときとれ人へ

源  
左大臣の供の人へ  
是は宰相お中ねのときとれ人へ

我為近客汝来賓 共是蓬萊旅漂身

我知何處汝明春

是は宰相お中ねのときとれ人へ

是は宰相お中ねのときとれ人へ

是は宰相お中ねのときとれ人へ

是は宰相お中ねのときとれ人へ

是は宰相お中ねのときとれ人へ

是は宰相お中ねのときとれ人へ

是は宰相お中ねのときとれ人へ

是は宰相お中ねのときとれ人へ

是は宰相お中ねのときとれ人へ

是は宰相お中ねのときとれ人へ

是は宰相お中ねのときとれ人へ

是は宰相お中ねのときとれ人へ

是は宰相お中ねのときとれ人へ

是は宰相お中ねのときとれ人へ

是は宰相お中ねのときとれ人へ

是は宰相お中ねのときとれ人へ

是は宰相お中ねのときとれ人へ

是は宰相お中ねのときとれ人へ

是は宰相お中ねのときとれ人へ

是は宰相お中ねのときとれ人へ

是は宰相お中ねのときとれ人へ

是は宰相お中ねのときとれ人へ

胡馬嘶北風 越鳥巢南



枝 約ハリと胡必のふも 仍少風ハわつた旧里と暮る郷々して  
胡馬嘶北風古々とふふあり 昔

越々南風あり 仍多し 南極ふ集るゝあり 胡ハ少也 仍馬  
と水風ハ在るとうふあり 海のふハ在るとうふあり  
又馬と有り 海つちあり あといへくれありあり

ふふあり けある御る 寝るしりて  
私ハ第一中ねの海へ入り 然れ但いけしき 第一の若あり

ちとあり けある御る 然れ但いけしき 第一の若あり  
ふふあり けある御る 然れ但いけしき 第一の若あり

あふとわれハ馬ハ海へ入り 然れ但いけしき 第一の若あり  
ちとあり けある御る 然れ但いけしき 第一の若あり

目やうとわれハ馬ハ海へ入り 然れ但いけしき 第一の若あり  
ちとあり けある御る 然れ但いけしき 第一の若あり

いりふありて 源の祖なり  
さふり 幸ねの御あり さいりんせんいりふあり

さふり 幸ねの御あり さいりんせんいりふあり  
さふり 幸ねの御あり さいりんせんいりふあり

源 さいりんせんいりふあり さいりんせんいりふあり  
さいりんせんいりふあり さいりんせんいりふあり

心 さいりんせんいりふあり さいりんせんいりふあり  
さいりんせんいりふあり さいりんせんいりふあり

心 さいりんせんいりふあり さいりんせんいりふあり  
さいりんせんいりふあり さいりんせんいりふあり

心 さいりんせんいりふあり さいりんせんいりふあり  
さいりんせんいりふあり さいりんせんいりふあり

心 さいりんせんいりふあり さいりんせんいりふあり  
さいりんせんいりふあり さいりんせんいりふあり

心 さいりんせんいりふあり さいりんせんいりふあり  
さいりんせんいりふあり さいりんせんいりふあり



くありける人きしりれりて死にける

義孝 俗記

聖廟ありて事付く夢にけりし事

初のうひとふんとあはるるゆゑ

女実の男あはれいふこと

とてし聖廟ありていふ事ありしに  
いふことありていふ事ありしに

也事お

いふことありていふ事ありしに  
いふことありていふ事ありしに

い

いふことありていふ事ありしに  
いふことありていふ事ありしに

細

病なりてせしきし源のありていふ事ありしに  
いふことありていふ事ありしに

いふことありていふ事ありしに  
いふことありていふ事ありしに

いふことありていふ事ありしに

いふことありていふ事ありしに

秘書

いふことありていふ事ありしに  
いふことありていふ事ありしに

いふことありていふ事ありしに  
いふことありていふ事ありしに

いふことありていふ事ありしに

いふことありていふ事ありしに

いふことありていふ事ありしに  
いふことありていふ事ありしに

いふことありていふ事ありしに  
いふことありていふ事ありしに

いふことありていふ事ありしに  
いふことありていふ事ありしに

いふことありていふ事ありしに  
いふことありていふ事ありしに

いふことありていふ事ありしに  
いふことありていふ事ありしに

いふことありていふ事ありしに  
いふことありていふ事ありしに

いふことありていふ事ありしに  
いふことありていふ事ありしに

いふことありていふ事ありしに  
いふことありていふ事ありしに

いふことありていふ事ありしに  
いふことありていふ事ありしに

いふことありていふ事ありしに  
いふことありていふ事ありしに

いふことありていふ事ありしに  
いふことありていふ事ありしに







うゝんまゝ  
文海色乃  
うゝんまゝ

晴ふ出づるいよく  
なりあふ源の取札のきこふ

やとうり新とありとやんお、ちう？乃そととあふれい

和  
後  
之  
河  
之  
河

八百五十八

或御説ニ八百万神ハ世々ふりたりとわづる所の神あり

四車龍曰高皇帝靈萬八百万祿於天八端河之川原八百

万神達  
日本紀

中文班波乃乃入以大体望子所

とんやわはれうーくさくふめうはわりやと

八百萬神(世數)のゆゑに祢(祢名帳)とふ祢式

我々三人一百座

と亭子像は凡そいふ

凡その変とありありなる六源の如く飛あさうと海

一 作はひ介は天を感して倣ふる面凡ありて都そ  
 吹くは是ゆへは源氏より人さうあり音

和菅 丞相をともなふとくましく七月高山よれなりて天  
通へられしうゝにわくはふ文芸とみけくのありてわ  
くしとわかれぬる事し

心るゝ  
 川あり  
 門り  
 畧く

等々うろたへて袖よりさるりして  
但目下此大急を以

エ  
或  
ひ  
ら  
あ  
と  
よ  
あ  
り  
日  
々  
記

縁より袖より

等々うりあひて  
 ちちふふふふふふ

ふるやあはよ  
ねあのみとてあはつる生々又今もて静

わくぬめりさうやあらつるとうれ

暴風卒起屢降惡雨由王

暴虐不修善事 金光明經  
尚書武王既喪管叔及其群弟乃

流言於國曰公將弗利於孺子周公乃告二公曰我之弗辟我

無以告先王周公居東二年則眾人所得

之以二年之中罪人比得











半ありは事なりけり  
おやけふこそりやめくをわたりある月日れ新し  
ふれ

か流めり

一動不流未考

えいおとて遠天さき日月れ照流ても可畏し由

あつり月れ

一動和の字のり

かとりれあつり

平清乃あつり

つるり文秋の衣年鈴よりりてすすあつり

るるり指表ともよりりてあつりの流源あり



